

AIが普及しても 人による情報収集はなくなる(前)

日本ビジネスインテリジェンス協会 理事長 中川 十郎 氏

商社マンとして20年以上、8カ国に海外駐在し、60カ国以上で海外事業や海外ビジネス開拓に携わった経験から、新ビジネスの開拓では情報を収集して活用することが欠かせないと語る日本ビジネスインテリジェンス協会(BIS)理事長・中川十郎氏に、BIS活動を通じて今見えていることを聞いた。

情報を見抜く力をつける

「商社マンとして海外で新しいビジネスを開拓するにあたって、人の3倍もの情報を集めてきました。メーカーは原料からモノをつくりますが、商社は集めた情報を組み立ててビジネスをつくります。まるで『情報商社』といえるほど、どこよりも情報を活用してきた業種ではないでしょうか」と中川氏は語る。

本人が直接見たり聞いたりして得た情報を「1次情報」、人から聞いたり、新聞、テレビ、ラジオから得られる情報を「2次情報」という。中川氏は新しいビジネスを開拓するうえで、とくに政府や産業界など政財界の関係者から収集した1次情報を役立ててきた。信頼できる人脈を構築して、「ヒューマンインテリジェンス(人的情報)」を活用することが最も大切だという。

「情報洪水ともいわれる今の時代は、情報の価値を見極めることが欠かせません。『グローバル企業の情報組織戦略』(中川氏ほか共訳、エルコ社刊)の著者であるベンジャミン・ギラード博士は、本当に役立つ情報は砂浜のなかのたった1粒ほどしかなく、その情報を見抜く力が

必要だと言っています」(中川氏)。

中川氏は、役立つ情報を見極めることが大切だと語る。BIS顧問であった故・小野田寛郎元陸軍少尉からは、「入手した情報は正しいかどうかを必ず確認して、納得できる情報だけを活用し、少しでも怪しいと感じたら活用してはいけない」と常日頃アドバイスされていたという。「その情報が正しいか否かは、情報源となる人が信用できるかどうかにかかっています」(中川氏)。

中川氏が海外駐在していたときは、現地の生の情報を集める努力をしていたという。日本語だけで生の現地情報を集めるのには限度があり、現地言葉で探すと深い情報が入手できるためだ。

情報に対する感度を高める

「欧米やイスラエルでは情報に対して、日本より熱心に研究がなされています。日本でも、情報の価値を改めて認識し、情報に対する感度を高めることが必要です。雑多な情報から役立つ情報を見抜いて、政治や経済に活用することが大切だと考えて、1992年にBISを設立しました」(中川氏)。